八丁に呼立而、鳴奈流鹿之、同卷、三十九丁に猪養山爾、伏鹿之、同卷、四十八丁に秋芽子師努藝、鳴鹿毛、同卷、同丁に山下響、鳴鹿之、同卷、四十九丁に秋野乎、旦往鹿乃と見えたる歌ども、みなしかとよむべく、かとよみては、しらべとゝのはねば、鹿をしかともいひしこと、いよ〳〵さだかにて、牡鹿にかぎりていふ名にはあらざるなり、萬葉集にしかといふに、をり〳〵牡鹿ともかけるは、ことわりをもて、牡といふもじをそへたるものぞ、さるは鹿を歌によむは、鳴聲をめでゝの事にて、すべてみな牡鹿のうへをいへればなり、故大人はこの事に心つかれずして、おもひあやまられたり、かみのくだりにもいへるごとく、八の卷ひと卷にも、鹿といふもじを、加とはよまれぬ歌五つあれば、萬葉集なるはみな加とよむべしとは、いはれぬことなるをや、

〔日本書紀十五顯宗〕白髮天皇○清寧二年十一月、播磨國司山部連先祖、伊與來目部小楯、於赤石郡、親辨新嘗供物、一云、巡行郡縣、取歛田租也、適會縮見屯倉首、縱賞新室以夜繼晝、○中略天皇○顯宗次起自整衣帶、爲室壽曰、○中略吾子等、子者男子之通稱也脚日木此傍山牡鹿之角、牡鹿此云左鳴子加、舉而吾儛者、○下略

〔安齋隨筆前編九〕一眞男鹿、古事記にあり、是にマヲシカと訓を付たる本あり誤也、サヲシカとよむべし、眞ノ字ヲサヲとよむ也、ヲを略してサヲシカ也、マヲシカと云こと、ハ例なき名目也

〔古事記上〕內拔天香山之眞男鹿之肩拔而、取天香山之天波波迦、此三字以音、木名、

〔古事記傳八〕眞男鹿、書紀に眞名鹿ともあり、眞は稱辭なり、又書紀顯宗卷に、牡鹿此云左鳴子加、とありて、佐袁鹿てふ名は、常に多く云めれど、眞男鹿と云るは他には見ず、故思に佐衣、佐筵、佐夜、佐寢など多く付云佐は眞と通ふなるべし、地名にも佐檜隈とも眞熊野とも云る通ひて聞ゆるをや、

〔袖中抄十〕すがるなるの

春なればすがるなる野のほとゝぎすほと〳〵いもにあはずきにけり

顯昭云、○中略草のすのかれてかるくなると云歟、○中略但古今歌に、